

「脱原発」の思いを共有

「フクシマ事故から脱原発へ」集会開かれる！

9月10日、福島県双葉地方原発反対同盟の佐藤龍彦さんをお招きして「現地福島と関西を結んで『フクシマ事故から脱原発へ』」集会が開かれました。会場は80名の参加者で熱気にあふれたものになりました。

佐藤さんは福島第一原発から南に17km離れた楡葉町で暮らしていたが、大地震と原発事故に巻き込まれ、避難生活を余儀なくされました。しかし「綺麗な福島を返せ」の決意のもと、福島市に戻り、放射能汚染の低減や脱原発のために活動しておられます。

集会では主催者から、私達の身近でも重大事故が起こってしまい、赤ちゃんからお年寄り迄本当に多くの方が被曝し、被曝は今後も続く。佐藤さんのお話をお聞きして、現地の被曝している人達の苦しみ、原発反対同盟を始め福島の人々の多面的な活動等を教えてもらい、今後の関西の運動の広がり、深まりに繋げていきたいと挨拶がありました。

次いで佐藤さんの経験を含め、福島の現状についてのお話に移りました（「佐藤さんのお話」参照）。

事故から半年経ち、避難生活ももう6ヶ月になる。福島では今、桃が大変美味しい時期だが生産者からは誰も買わず値崩れを起こしていると聞かされる。さくらんぼがそうであったし、これからの梨・りんごが売れない状態が続く。これで稲作がダメになれば一次産業が崩壊する。会津の観光も殆どキャンセルされている。県の人口が200万人をきり、町が消滅し、福島県が縮小している。この先どうしていったらいいのか、6ヶ月間、県民は苦悩の連続である。10万人の避難者がおり、100万人が放射線管理区域以上の被曝線量のところで暮らす。住んでいいのか避難した方がいいのか。夫は仕事があり、祖父母はその生まれ育った土地で暮らし、その土地を守ってきた。帰りたい、帰れない、様々なところで大変な苦悩がある。自殺者も増加した。全てを奪った原発事故。

また原発の冷却がなかなか進まない中、原発作業員は高濃度の放射線のもと40°C・湿度70~80%の中、全面マスクで仕事をする過酷な労働環境で働いている。労働の誇りなどなくなってしまふ。命を心配してしまふ。このような状態で働いていいのか。安全管理・補償などなぜできないのか。

淡々とした語り口のなかにも、普通の日常生活を奪った原発事故・放射能汚染、綺麗な故郷への思い、原発さえなければの思いが切々と伝わってきました。「ヒバクシャ」として自覚しなければ、この先へは進めないとも言われました。今佐藤さんは綺麗な福島を取り戻すために活動しておられます。脱原発、全ての原発の停止と廃炉を求めていく、この事態を引き起こした東電、国の責任を鋭く問い、補償を求めていく、「ヒロシマ・ナガサキ」のように「福島」がカタカナに変わろうとしている今、きちんとした証人となって全国へ、世界へと訴えていきたいと結ばれました。

休憩時間のあとは、中山一郎さんのトークとCDによる歌の紹介で、もと若者はおおいに盛り上がりました。「腰まで泥まみれ」はベトナム戦争の集結を2年早めたと言われているが、今はフクシマ。「脱原発」に向かうかどうか、今が「腰まで=分水嶺」の時期と強調され気概が伝わってきました。

最後に主催者から政府交渉と今後の課題が報告されました。住民と労働者の健康補償を求めた2回の政府交渉で、国の責任を明確にするという点では国は本気でやろうとしていないこと、100mSv以下の低線量被曝は切り捨てようとしていることなどが明らかになったと報告がありました。今後新しい要請書を作り、脱原発の運動と結合して取組みを強めたいと力強く報告されました。

翌日の「戦争はいやや、核なんかいらへん！フェスティバル2011」で脱原発を訴える

翌11日には「戦争はいやや、核なんかいらへん！フェスティバル2011」が長居公園で開かれました。事故が未だ収束しない中ですでに半年。若狭ネットの久保さん、チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西の振津さんと共に壇上に登った佐藤さ

さんは被災直後の混乱した様子やまだまだ続く厳しい避難生活、故郷への思い、そして「綺麗な福島を返せ」の思い、脱原発への決意を訴えられ大きな拍手に包まれました。

